様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号： １２６０１
研究種目： 基盤研究(A)
研究期間： 2011～2014
課題番号： ２３２４２００４

研究課題名（和文） 「インド哲学諸派における＜存在＞をめぐる議論の解明」

研究課題名（英文） Research on the Ontological Discussions in Various Schools of Indian Philosophy

研究代表者
丸井　浩（Marui, Hiroshi）

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：３０２２９６０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　36,100,000円

研究成果の概要（和文）：世界認識の枠組みとしての存在論のインド的展開を解明するために、40名規模の日本の主要なインド哲学研究者を4班に有機的に分属させた共同研究体制を組織し、毎年1回の全体研究会（合宿）、ウィーン科学アカデミーとの共催による国際シンポジウム開催、パネル発表による中間報告を経て、最終年度には東西哲学対話再出発を意図した公開シンポジウム、および主要な個別研究成果（論文16本）を収めた論文集の刊行等を行った。

研究成果の概要（英文）：To elucidate various problems of ontological discussion in major Schools or Systems of Indian philosophy, nearly forty Japanese scholars were integrated into four working groups: (1) Nyaya-Vaisesika/Buddhism, (2) Mimamsa-Vedanta, (3) Vyakarana/Jainism, and (4) Shaivism/Sankhya. In addition to annual conference of the whole project team, the "Japan-Austria International Seminar on Transmission and Tradition: The Meaning and Role of 'Fragments' in Indian Philosophy" (20-24 Aug. 2012, Matsumoto) in collaboration with the Austrian Academy of Science, the panel "Various Aspects of Ontological Discussion in Indian philosophy" (1 Sep. 2013, Matsue) and the symposium "Indian Traditional Frameworks of World View: An Attempt to Restart a Dialogue between the Eastern and Western Thoughts" (23 Nov. 2014, Tokyo) were held. As the final result of the present project, we published the collection of papers as a special Issue of the Studies in Indian Philosophy and Buddhism (the University of Tokyo).

研究分野：インド哲学

キーワード：インド哲学　ダルシャナ　存在論　形而上学　カテゴリー論　東西哲学対話

１．研究開始当初の背景

(1) インドにおける〈存在〉をめぐる哲学的議論は、ウパニシャッドの神秘的一元論ないしその派生形と見なしうるサーンキヤ、ヨーガの二元論といった「垂直的」存在論の系譜と、「六師外道」の思想にその一つの淵源が求められ、ヴァイシェーシカの存在カテゴリー論に典型的に顕在化する多元論的な「水平的」存在論という二系統に分けて考えうる。哲学と宗教が相補的に錯綜しつつ展開してきたインド思想では、形而上学的な議論が実に豊富であり、かつ多様性に溢れている。インド哲学諸派に展開する存在論・形而上学の諸相を解明することは、仏教を含むインド思想の全体像理解に重要な手がかりを提供するばかりでなく、新たな比較思想的視点の開拓にも繋がるはずである。

(2) しかしながら従来のインド哲学研究では、各学派の存在論が個別的、概説的に論じられるにすぎなかった。ただし国際学会での日本人研究者の活躍ぶりに象徴されるように、日本のインド哲学研究の水準は、とりわけミクロレベルの精密なテキスト読解に関して言えば、すでに世界のトップクラスに達していると思われる。このような状況を踏まえて、世界認識の枠組みとしての存在論・カテゴリー論のインド的展開を解明する、国際的にも初めての本格的共同研究をスタートすることになったのが本研究プロジェクトである。組織化された共同研究チームを十分に編成できるだけの、有能な研究者の数と、専門の多様性に富んだ、日本ならでは強みを十分に生かした企画である。

２．研究の目的

(1) その目的は、世界の第一線で活躍する日本のインド哲学研究者を結集させて、いわゆる「六派哲学」を中心としつつ、仏教、ジャイナ教、さらにはヒンドゥー教神学をも取り込んだ形の「インド哲学諸派」における、〈存在〉をめぐる議論を、以下の二つの研究レベルを統合した総合的研究を推進して、インドの存在論・形而上学の全体像と特質を解明することにある。

(2) 第一には、必要に応じてテキスト校訂にまで掘り下げた厳密な文献実証的な研究方法を踏まえて、各学派単位、あるいはテキスト単位の概念分析や理論的展開を解明する、個別研究のレベルである。一般にインド哲学文献はテキスト上の問題が多く、かつ存在論、形而上学というテーマ設定そのものが従来のインド哲学研究においては甚だ不十分だったという研究の現状から見て、このようなミクロレベルの緻密な基礎研究は不可避だからである。

(3) しかしミクロレベルの研究にとどまれば、概して問題意識は局所化し、個別の議論の背景にある学派間の論争や問題意識の全体像が見失われる危険性が高い。したがって他方では、学派横断的、あるいは比較思想的な視点を導入したマクロの視点が必須となる。第一のミクロレベルでは日本のインド哲学研究の水準は、質量ともに世界のトップクラスに達しているが、第二のマクロレベルの哲学思想研究は、まだ十分に成熟していない。従来の学派単位の教理概説のレベルから、ダイナミックな思想展開の内実へと踏み込んだ哲学研究へと飛躍するためには、各学派の専門家が一堂に会して、存在論という共通テーマのもとで、学派横断的な議論展開の実際と理論的可能性を討議し合う、共同研究の仕組みが必須な段階に来ている。その際、大学単位で分散化していた、あるいは緻密なテキスト研究に専念するあまり孤立しがちな、若手研究者を共同研究組織に有機的に位置づけることが、今後のインド哲学研究の発展にとって必須となる。さらには、インド哲学とは異なる分野（西洋哲学やユダヤ思想研究）の専門家との対話、討論を通じて、インド哲学を相対化することで、その今日的、未来的な意義をさぐる切り込みもまた重要となる。このような巨視的スケールのもとで、本格的なインド哲学共同研究の体制を確立することが本研究プロジェクトの、もう１つの重要な目的となっている。

(4) 具体的にめざす研究成果としては、個別研究の成果を、国内外の学会・学術雑誌における口頭発表・論文発表へと繋げることはもとより、共同研究成果として国際学会ないし国内学会において、インド哲学諸派における存在論研究を共通テーマとしたパネル発表として結実させるとともに、若手研究者を中心とする最新の個別成果は論文集としてまとめる。さらに公開シンポジウムを企画して、東西哲学対話の再出発をめざすことも本研究プロジェクトの最終目的の一つである。

３．研究の方法

(1) まず研究組織としては、現在日本を代表するインド哲学諸派の専門家たち、すなわち研究代表者である丸井浩（ニヤーヤ、ヴァイシェーシカ学派、東京大学教授）に加えて、和田壽弘（新ニヤーヤ学派、名古屋大学教授）、吉水清孝（ミーマーンサー学派、東北大学教授）、小川英世（文法学、広島大学教授）、片岡啓（ヒンドゥー教学、九州大学准教授）を研究分担者に、桂紹隆（仏教学、龍谷大学教授）、藤永伸（ジャイナ教、都城高専教授）を連携研究者にして、この７名を下記の各班の班長ないし班内ユニット長に据えた上で、大学の壁を越えて全国から、また一部は海外在住者も含めて、若手・中堅の研究者を研究協力者として積極的に登用して、最終的には全体で 40 名規模の共同研究体制を確立した。

そしてメンバー全員を、①ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ／仏教班、②ミーマーンサー・ヴェーダーンタ班、③文法学／ジャイナ教班、④シヴァ教／サーンキヤ班に分属させ、『パダールタ・タットヴァ・ニルーパナ』『ヨーガバーシュヤ・ヴィヴァラナ』『タットヴァサングラハ・パンジカー』『マハーバーシュヤ』『ヴァーキヤパディーヤ』等の文献講読をグループ研究として推進するほか、各人の個別研究を行うことにした。また各研究班の上には全体を統括する総括班を設け、研究代表者・班長・班内ユニット長をコアメンバーとして、学派横断的な共同研究を遂行する体制を整えた。

(2) 具体的には、毎年 1 度、合宿形式で全体研究会を開催し、共通テーマに則した個人発表と全体討議を積み重ねる。そのほか班内あるいは班横断的なグループ研究も随時開催してゆくこととした。そして個別研究の成果は、日本印度学仏教学会、インド思想史学会、国際サンスクリット学会、国際ダルマキールティ学会など内外の学術大会で発表するほか、中堅・若手研究者の注目すべき業績は、最終年度に論文集として刊行することとなった。

(3) 一方、共同研究の成果発表の場としては、コアメンバーによるパネル企画を中間発表として、また最終年度には 4 班を代表して各班長が、インドの存在論ないし形而上学の特質を示すためのテーマ設定を行い、それぞれ西洋哲学ないしユダヤ思想の専門家を討議者に迎えて、比較哲学の視点を導入した公開シンポジウムを企画する方針を立てた。

(4) 研究組織全体の研究計画、企画内容、あるいは成果公開の方針策定等を討議するために、年に数回のコアメンバー会議を開催。コアメンバー内および研究メンバー全体相互の意思疎通、意見交換を円滑にするためにメーリングリストを特設した。また研究プロジェクトの広報活動を徹底させるために専用ホームページを開設した。

４．研究成果

(1) 共同研究の成果としては、まず、日本印度学仏教学会第 64 回学術大会において、パネル「インド哲学における〈存在〉をめぐる議論の諸相」(2013 年 9 月 1 日) を企画し、中間発表を行った。報告記事は『印度学仏教学研究』62(2)、2014 年 3 月、pp. 795–784 に掲載されている。

(2) また、国際的な共同研究という点でも画期的な成果を収めることができた。とりわけ、日墺共同国際シンポジウム「伝統知の継承と発展」(2012 年 8 月 20–24 日、信州大学) を、ウィーン科学アカデミーと共催で実施したことは特筆に値する。これは日本学術振興会二国間交流事業に採択された企画であり、直接、インド哲学諸派の存在論をテーマとしているわけではないが、テキストが現存しない「断片資料」をめぐる諸問題は、〈存在〉をめぐるインド哲学諸派の議論展開の歴史を再構築する上で、きわめて重要な意味を担っており、本研究プロジェクトの進展にとっても注目すべき成果をあげることができた。仏教でなくインド哲学プロパーの研究者が集う、このような本格的な国際シンポジウムが日本で開催されたのは今回が初めてのことであり、このような国際会議が可能となったのも、この科研プロジェクトによるインド哲学の共同研究体制が確立していたからである。なお、このシンポジウムの詳細は、『東方学』126、2013 年 7 月、pp. 147–157 に掲載された、丸井による報告記事に記されている。このほか、京都大学の出口康夫准教授の分析アジア哲学研究グループと国際ワークショップ “Ontology of Asian Philosophy” (2013 年 4 月 13–14 日、龍谷大学) を共催し、八木沢敬、Tom Tillemans、Mark Siderits、Jay Garfield、林鎮國教授ほかと研究交流を行った。さらに、出口、八木沢両氏とは 2 度のワークショップを共催し、分析哲学とインド哲学の対話が大きく前進した。

(3) こうして、共同研究の推進は比較哲学、東西哲学対話の道を開く結果となり、本研究プロジェクトの最終成果の公開を兼ねたシンポジウム「インドの大地が育んだ世界認識の枠組み――東西哲学対話の再出発――」(2014 年 11 月 23 日、東京大学) として結実することになった。4 つの報告 (「因果」「普遍と個体」「言葉と存在」「神と世界」) は、本プロジェクトのコアメンバーであるインド哲学研究者 (順に丸井浩、吉水清孝、小川英世、片岡啓) が行ったが、特別講演には京都大学西洋古代哲学史研究室の中畑正志教授を迎え、また各報告に対するコメンテーターには西洋哲学研究者 3 氏 (一ノ瀬正樹氏、松浦和也氏、出口康夫氏) を招き、「神と世界」に対してはユダヤ思想研究者の手島勲矢氏がコメントした。このほか、プロジェクトメンバーの個別研究、ないし班内共同研究の成果は、日本印度学仏教学会、インド思想史学会、国際サンスクリット学会、国際ダルマキールティ学会など内外の学術大会で発表され、その一部は論文としてすでにそれぞれの学術雑誌等に掲載されている。その主要な成果は下記の５に列挙した通りである。

(4) この 4 年間の研究活動の中でも、メンバーの大半が集まって、各人の研究発表を聞き、その後に濃密な討論を行う合同研究会の開催は、本研究プロジェクトの最も重要な活動成果として特筆に値すると思われる。毎年 1 回開催した合同研究会の日・場所、個人発表の数 (4 年間で合計 29) は以下の通りである。①2011 年 8 月 24–25 日、信州大学松本キ

ャンパス：個人発表 6（ほかに桂紹隆氏の基調講演）②2012 年 8 月 18−19 日、信州大学松本キャンパス：個人発表 4（ほかに八木沢敬氏の特別講義） ③2013 年 8 月 23−24 日、名古屋大学：個人発表 5 ④2014 年 9 月 13−15 日、松本市内：個人発表 14。なお、これらの個人発表をふまえて学術論文としてまとめられた特に注目すべき 16 点が、最終の 2014 年度末に『インド哲学仏教学研究』（東京大学）の特集号の論文集として刊行された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 112 件）

1. 丸井浩「インドの寛容精神と包括主義—中村博士の思想研究の眼差しー」『比較思想研究』41: 18—27. 2015. 査読有.
2. 和田壽弘「サンスクリット語の構造から見るインド的唯名論」『虚構の形而上学』（春風社）. 11—48. 2015. 査読無.
3. 片岡啓「仏教の普遍批判 ——Nyāyamañjarī 和訳——」『哲学年報』74: 49—117. 2015. 査読無.
4. 小川英世「「＜能成者＞詳解」（Sādhana-samuddeśa）の研究—VP 3.7.80」『比較論理学研究』12:39—68. 2015. 査読無.
5. 藤井隆道「存在するとはいかなることか ——sattā の実在をめぐる論争とその背景——」『インド哲学仏教学研究』2:105—120. 2015. 査読有.
6. 日比真由美「時間・方角は独立の実体か ——バーサルヴァジュニャによる批判を中心に——」『インド哲学仏教学研究』22:31—56. 2015. 査読有.
7. 平野克典「内属（samavaya）の関係項の〈存在〉構造」『インド哲学仏教学研究』22:57—68. 2015. 査読有.
8. 堀田和義「内属は成立しうるか？ ——Bhavasena の samavaya 批判——」『インド哲学仏教学研究』22:215—226. 2015. 査読有.
9. 石村克「実在・存在・非存在 ——クマーリラの非存在の実在論証を中心に——」『インド哲学仏教学研究』22:91—103. 2015. 査読有.
10. 岩崎陽一「所有と相続の形而上学」『インド哲学仏教学研究』22:69—89. 2015. 査読有.
11. 狩野恭「インドにおける主宰神の存在論証をめぐる論理学的基本問題」『インド哲学仏教学研究』22:191—214. 2015. 査読有.
12. 川村悠人「Astadhyayi 5.2.94 における asya と asmin の言明目的——matUP 導入をめぐる第六格接辞と第七格接辞の意味論」『インド哲学仏教学研究』22:227—249. 2015. 査読有.
13. 近藤隼人「因中有果説の極北」『インド哲学仏教学研究』22:121—150. 2015. 査読有.
14. 護山真也「プラジュニャーカラグプタの〈知覚=存在〉説」『インド哲学仏教学研究』22:175—190. 2015. 査読有.
15. 斉藤茜「パシュヤンティー理論とスポータ理論の作用領域」『インド哲学仏教学研究』22:265—293. 2015. 査読有.
16. 志賀浄邦「仏教における存在と時間：三世実有論をめぐる諸問題を再考する」『インド哲学仏教学研究』22:151—174. 2015. 査読有.
17. 鈴木孝典「ヴァイシェーシカ学におけるカテゴリー論と宗教的目標」『インド哲学仏教学研究』22:1—18. 2015. 査読有.
18. 畝部俊也「言葉の使用の根拠としての「存在」——文法家にとっての「世界認識の枠組み」としての bhava——」『インド哲学仏教学研究』22:295—311. 2015. 査読有.
19. 渡邉眞儀「属性（guna）カテゴリーの検討——Bhasarvajna による伝統説批判の一例として」『インド哲学仏教学研究』22:19—29. 2015. 査読有.
20. 李宰炯「バルトリハリの〈時間〉論——二次的存在性（upacarasatta）と過去・未来表現の成立」『インド哲学仏教学研究』22:251—264. 2015. 査読有.
21. 丸井浩「インド哲学における〈存在〉をめぐる議論の諸相（第 64 回学術大会パネル発表報告）」『印度學佛教學研究』62(2): 270—271. 2014. 査読無.
22. 丸井浩「ジャヤンタによるシャクティ概念批判 — Syādvādaratnākara における "Pallava" の引用断片に関する追記 —」奥田聖應先生頌寿記念『インド学仏教学論集』189—204. 2014. 査読有.
23. 桂紹隆「清弁とアポーハ」『インド論理学研究』7:1—30. 2014. 査読無.
24. 小川英世「意味と存在—バルトリハリのメタ存在論」『比較論理学研究』11:63—74. 2014. 査読無.
25. 片岡啓「ダルモッタラの概念論」『インド論理学研究』7:95—137. 2014. 査読無.
26. 片岡啓「ジャヤンタの普遍論 ——Nyāyamañjarī 和訳——」『哲学年報』73:37—93. 2014. 査読無.
27. Hideyo Ogawa. “Bhartṛhari on Three Types of Linguistic Unit—Meaning Relations.” Vyākaraṇa across the Ages, edited by George Cardona. 217—279. 2013. 査読有.
28. 丸井浩「『正しく知られるべき対象』（prameya）としての artha 概念の変貌 ——ジャヤンタが語るニヤーヤ哲学の思想史的位置を探る一視点」『イドの哲学仏教学研究』10:19—59. 2012. 査読有.
29. Hiroshi Marui. “The Structure of the Whole Discussion on Śabda in the Nyāyamañjarī.” Journal of Indian and Buddhist Studies 61(3): 35—44. 2013. 査読有.

30. 吉水清孝「クマーリラにおける個体中心の存在論―アリストテレスとの比較による試論―」『インド論理学研究』5:1―46. 2012. 査読有.
31. Hideyo Ogawa. "Patañjali's View of a Sentence Meaning and Its Acceptance by Bhartṛhari." Devadattīyam. 159―188. 2012. 査読無.
32. 和田壽弘「新ニヤーヤ学派における非存在（abhāva）の成立要件――反存在（pratiyogin）の観点から――」『インド論理学研究』5:47―72. 2012. 査読有.
33. Kiyotaka Yoshimizu. "How to Refer to a Thing by a Word: Another Difference between Dignāga's and Kumārila's Theories of Denotation." Journal of Indian Philosophy 39(4/5): 213―230. 2011. 査読有.
34. Hideyo Ogawa. "Abstraction (apoddhāra) Theory and a Sentence Meaning: A Study of the Vṛtti on VP 2.39." Saṃskṛta-sādhutā, edited by C. Watanabe et al. 397―421. 2012. 査読有.

〔学会発表〕（計 134 件）
1. Kiyotaka Yoshimizu. "Another Look at Avinābhāva and Niyama in Kumārila's Exegetic Works." 5th International Dharmakirti Conference. 2014/08/29. ハイデルベルク（ドイツ）
2. 小川英世「「壷がある」―インド文法学派の存在言明分析」広島哲学会. 2014/11/01. 広島大学（広島県・東広島市）
3. 丸井浩「因果」シンポジウム：インドの大地がはぐくんだ世界認識の枠組み 2014 /11/23. 東京大学（東京都・文京区）
4. 吉水清孝「普遍と個体－クマーリラにおける両者の非別異」シンポジウム：インドの大地がはぐくんだ世界認識の枠組み 2014 /11/23. 東京大学（東京都・文京区）
5. 小川英世「インド文法学派「ある」の意味論的考察」シンポジウム：インドの大地がはぐくんだ世界認識の枠組み 2014 /11/23. 東京大学（東京都・文京区）
6. Toshihiro Wada. "The Requisites for Assuming Absence (abhāva) in Navya-nyāya" Special Lecture, Organized by the Indian Council of Philosophical Research. 2013/12/06. ニューデリー（インド）.
7. 片岡啓「神と世界」シンポジウム：インドの大地がはぐくんだ世界認識の枠組み 2014 /11/23. 東京大学（東京都・文京区）
8. 片岡啓「シヴァ教の存在論」日本印度学仏教学会第 64 回学術大会. 2013/09/01. 島根県民会館（島根県・松江市）
9. 小川英世「意味と存在―バルトリハリのメタ存在論」日本印度学仏教学会第 64 回学術大会. 2013/09/01. 島根県民会館（島根県・松江市）
10. 和田壽弘「存在とカテゴリー ――新ニヤーヤ学派のカテゴリー論――」日本印度学仏教学会第 64 回学術大会. 2013/09/01. 島根県民会館（島根県・松江市）
11. 吉水清孝「ミーマーンサー・ヴェーダーンタ存在論における bhedābheda をめぐって―アリストテレス存在論との比較から―」日本印度学仏教学会第 64 回学術大会. 2013/09/01. 島根県民会館（島根県・松江市）
12. 小川英世「インド文法学派の意味論を考察するための諸命題」CAPE ワークショップ：哲学とインド学のコラボレーション. 2013/08/03. 京都大学（京都府・京都市）
13. Hiroshi Marui. "How to Identify the Fragments from the "ācāryāḥ" and "vyākhyātāraḥ" in the Nyāyamañjarī." Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition. 2012/8/21. 信州大学（長野県・松本市）
14. Hideyo Ogawa. "On a Bias for Doxographical Accounts in Later Commentaries on the Vākyapadīya of Bhartṛhari." Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition. 2012/8/20. 信州大学（長野県・松本市）
15. Hideyo Ogawa. "Bhartṛhari on Three Types of Linguistic Unit-Meaning Relations." 15th World Sanskrit Conference. 2012/1/7. ニューデリー（インド）.
16. 丸井浩「インドの合理主義思想と仏教―玄奘が訳したインド哲学諸―」第 12 回東方学院・酬仏恩講合同講演会. 2011/11/26. 薬師寺（奈良県・奈良市）

〔図書〕（計　2　件）
1. 丸井浩『ジャヤンタ研究―中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学―』山喜房仏書林. 2012. 576 pp.
2. Katsunori Hirano. Nyāya-vaiśeṣika Philosophy and Text Science. Motilal Banarsidass. 2012. 125 pp.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.darshana.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
丸井　浩（MARUI, Hiroshi）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：30229603

(2)研究分担者
和田　壽弘（WADA, Toshihiro）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00201260

吉水　清孝（YOSHIMIZU, Kiyotaka）
東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20271835

小川　英世（OGAWA, Hideyo）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00169195

片岡　啓（KATAOKA, Kei）
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：60334273

(3)連携研究者

桂　紹隆（KATSURA, Shoryu）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：50097903

藤永　伸（FUJINAGA, Shin）
都城工業高等専門学校・一般科目文科・教授
研究者番号：70209071